

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：32519

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K11270

研究課題名(和文) 訪問看護師と協同行う訪問介護員のための看取り学びシステムの構築

研究課題名(英文) Development of an end-of-life care learning system for Home Helpers in cooperation with visiting nurses

研究代表者

二宮 彩子(Ninomiya, Ayako)

城西国際大学・看護学部・教授

研究者番号：50332630

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、訪問介護員の在宅看取りに関する自信について、その状況を明らかにし、不安なく在宅看取りケアを行えるための学び支援システムの提言を行った。対象訪問介護員の約4割が在宅看取りに自信がなく、自信を持つことに影響を与えていたのは「訪問経験年数」が長いこと、「訪問看護師との連携」が良好であること、「死にゆく患者へのケアの前向きさ」をもつことであった。また死生観について訪問介護員は訪問看護師と比較して、死から回避する傾向がみられた。これらの結果より、訪問看護師と連携強化を行い、死の準備教育も含めた、在宅看取りのための研修体制を検討する必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今後在宅看取りの増加が見込まれる中で、訪問介護員の役割は益々重要となる。訪問介護員が不安なく、質の高い在宅看取りケアを行うためのサポートシステムを構築することが必要である。その一助とするため、本研究では、訪問介護員の看取りケアに対する不安の原因や自信に影響を与える要因を明らかにした。それらの結果を、訪問看護師と連携しつつ、訪問介護員の看取りケアの支援に反映することが本研究の意義である。

研究成果の概要(英文)：This study clarified the status of home helpers' confidence in end-of-life care at home, and recommended for a learning support system to enable them to provide end-of-life care at home without any anxiety. About 40% of the home helpers were not confident in end-of-life care at home, and the factors influencing their confidence were "years of visiting experience," "good cooperation with visiting nurses," and "Positive attitude toward caring for the dying patient". In terms of their views on life and death, the home helpers tended to avoid death more than the visiting nurses. Based on these results, it is necessary to strengthen cooperation with visiting nurses and consider a learning system for end-of-life care at home, including education on preparation for death.

研究分野：地域看護学

キーワード：在宅看取り 訪問介護員 訪問看護師 研修

## 1. 研究開始当初の背景

人生の最終段階を迎える場として在宅を望む人が多い中、我が国の在宅看取り割合は低い。その要因のひとつに在宅看取りに関わる訪問介護体制の不足が挙げられる。訪問介護員は重要な役割を担うが、訪問介護員の看取りの支援経験は他の職種と比較して少なく、看取りを担当する自信も無い人が多い。自信がない理由としては、「必要な医療知識・技術に不安がある」「臨機応変な判断・決断に不安がある」「関係職種間の調整能力に不安がある」との回答が多く<sup>1)</sup>、このままでは質の高い介護を提供することはできない。それと同時に、介護職一人一人が安心して、自信をもって看取りにかかわることができなければ、今後の訪問介護員の人員確保につなげることもできない。これらの「不安」を払拭するためには、その内容から考えて、看護職が関わりつつ、果たすべき役割が大きいと考えた。

## 2. 研究の目的

以上の背景から、「訪問介護員が不安なく、確実に看取りケアに取り組むための支援として、有効かつ、実践的なシステム構築はどのようなものか。システム構築の上で、看護職が連携し、支援できる可能性は何か」を明らかにするため、次を本研究の目的とした。

- ①看取りの状況における療養者・家族の心身の変化と必要な対処法に関する学習内容を検討すること
- ②上記を基に近隣の訪問看護事業所と訪問介護事業所が協働で看取りについて学ぶシステムを構築すること

## 3. 研究の方法

(1) 【インタビュー調査】まず、在宅看取りに関する課題を明らかにするため、都内訪問看護ステーション（所長・訪問看護師）及び都内訪問介護事業所（訪問介護員＝以降、ホームヘルパーとする）を対象として、インタビュー調査を行った。

(2) 【アンケート調査】次に、厚生労働省「介護サービス情報公表システム」から層化抽出法で抽出した各都道府県の訪問看護ステーション及び訪問介護事業所を対象として、在宅看取りに対する意識について、Webアンケート調査を行った。訪問看護ステーション 2,785 件、訪問介護事業所 3,449 件の職員 1 人ずつを対象とした。調査項目は①事業所の概要 ②回答者の属性 ③在宅看取り経験について ④在宅看取りを十分に行う自信（4 件法） ⑤ FATCOD-B-J（Frommelt Attitude Toward Care Of Dying scale<Frommelt のターミナルケア態度尺度>）（5 件法） ⑥ホームヘルパー/訪問看護師との連携状況（4 件法） ⑦看取りに関する研修経験（あり/なし） ⑧死生観尺度（2000, 平井啓）とした。

## 4. 研究成果

(1) 【インタビュー調査より】ホームヘルパーの在宅看取りに対する思いとして、①訪問時、既に対象者が亡くなっている場面に遭遇するかもしれないという強い不安がある、②急変時において訪問看護師へどのように連絡・報告をしたらよいのかわからず、知識不足を感じる、③対象者の希望とやらなければならないケアとのギャップに戸惑う、等が挙げられた。訪問看護師の思いとしては、①ホームヘルパーに部分的なケアだけではなく、全体を見渡してもらいたい、②ホームヘルパーのスキルも大事だが、何かいつもと異なるという感覚、危機感、確認してみようとする気持ちなどを持ってほしい、③介護事業所によって、質のレベルに差があると思う、④サ責を通して担当ヘルパーと連携をとることが多く、時間を要したり、正確ではない場合もあり、非効率を感じる、等が挙げられた。

(2) 【アンケート調査より】回答のあった訪問看護師 324 人、ホームヘルパー 288 人を単純集計の分析対象とした。また、訪問介護事業所に関する 2 項ロジスティック回帰分析については、分析項目全てに欠損値のない 272 人を分析対象とした。

### ①回答者の属性及び在宅看取り経験（表 1）

在宅看取り経験について「あり」と答えたのは、訪問看護師は 94.4%、ホームヘルパーは 72.9%であった。

		看護師(n=324)	ヘルパー(n=288)
		人数(%)mean±SD	人数(%)mean±SD
性別	男性	41(12.7)	98(34.0)
	女性	283(87.3)	186(64.6)
	不明	0(0.0)	4(1.4)
年齢		48.4±9.2	48.0±10.1
立場(複数回答可)	管理者	258(79.6)	190(66.0)
	サービス提供責任者		160(55.6)
	スタッフ	54(16.7)	62(21.5)
	その他	12(3.7)	
在宅看取り経験	あり	306(94.4)	210(72.9)
	なし	14(4.3)	78(27.1)
	不明	4(1.2)	0(0.0)
十分な看取りケアを行う自信	ある	123(38.0)	43(14.9)
	少しある	150(46.3)	134(46.5)
	あまりない	45(13.9)	93(32.3)
	ない	5(1.5)	17(5.9)
	不明	1(0.3)	1(0.3)

②看取りケアについての自信 (表1)

十分な看取りケアを行う自信について「あまりない」もしくは「ない」と答えたのは、訪問看護師 15.4%、ホームヘルパー38.2%であった。

③ホームヘルパーにおける看取りケアに自信のない理由 (図1)

看取りケアに自信がないと答えたホームヘルパーのうち85%が、「看取りに必要な医療知識・技術に不安がある」ことを理由に挙げた。

④ホームヘルパーの在宅看取りの自信に影響を及ぼす要因 (表2)

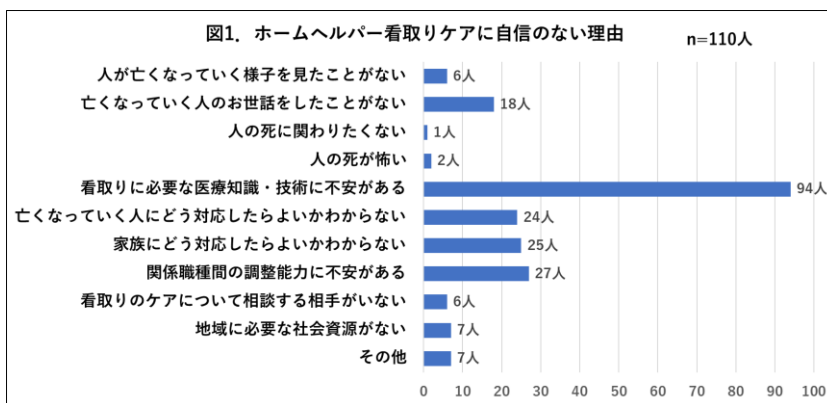
ホームヘルパー経験年数、訪問看護師との連携、死に行く患者へのケアの前向きさ、が在宅看取りの自信に影響を及ぼしていた。

⑤職種による死生観の違い (図2)

訪問看護師は「解放としての死」「人生における目的意識」「死への関心」「寿命観」などがホームヘルパーより高く、ホームヘルパーは「死からの回避」が訪問看護師より高かった。

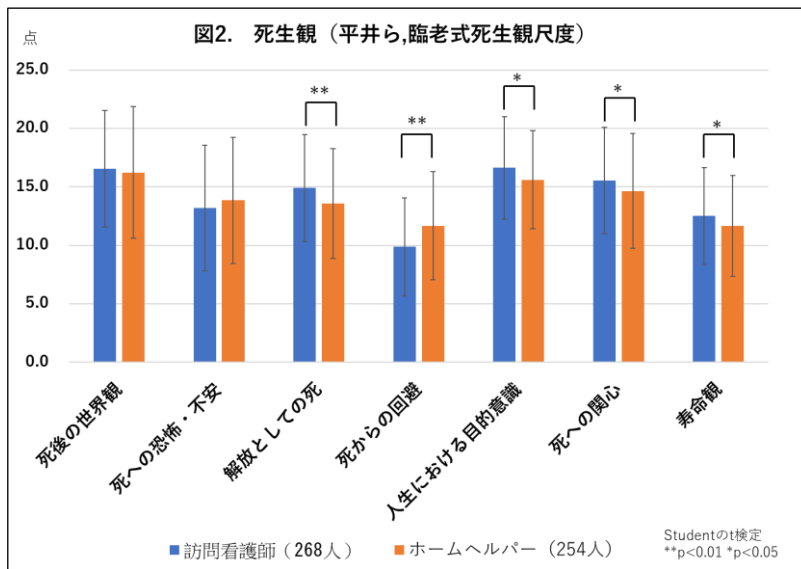
(3)まとめ

ホームヘルパーにおいて、在宅看取りに対して、十分なケアを行う自信がない者は、全体の約4割であった。自信を持つことに影響を与えていたのは、「訪問経験年数」が長いこと、「訪問看護師との連携」が良好であること、「死にゆく患者へのケアの前向きさ」をもつこと、であった。特に「訪問看護師との連携」が良好であることは、良好でない状態と比べ、3.7倍自信を持つ可能性を高めるということから、連携強化を行う実現可能な方法を具体的に検討する必要があるのではないか。



	モデル1				モデル2			
	OR	95%CI		p-value	OR	95%CI		p-value
		下限	上限			下限	上限	
年齢 (1年の増加)	1.012	0.981	1.043	0.455	1.014	0.981	1.047	0.413
ホームヘルパー経験年数 (1年の増加)	1.057	1.011	1.106	0.015	1.072	1.022	1.126	0.005
看取りの訪問経験 あり (ref.なし)	2.237	1.169	4.281	0.015	1.601	0.794	3.227	0.188
在宅看取りの研修経験 あり (ref.なし)	1.223	0.682	2.195	0.499	1.130	0.609	2.096	0.698
同居家族との死別経験 あり (ref.なし)	1.368	0.776	2.411	0.279	1.397	0.769	2.538	0.272
看護師との連携 うまくいっている (re.うまくいっていない/看護師が介入していない)	3.637	1.895	6.980	<0.001	3.767	1.861	7.622	<0.001
死にゆく患者へのケアの前向きさ* (1点の増加)					1.110	1.064	1.158	<0.001

\*日本語版ターミナルケア態度尺度 (FATCOD-B-J)



看取りに関する研修経験の有無は、自信に影響を及ぼしておらず、これまでの研修スタイルを見直し、「死にゆく患者へのケアの前向きさ」が高まるような内容の研修を検討してみるのも一案と考える。また、ホームヘルパーの死生観について、死への恐怖・不安は訪問看護師と同等であるが、死から回避する傾向が強く、死を向き合うような“死の準備教育”も専門職教育に取り入れる検討も必要と思われる。

<引用文献>

1) 山本則子 平成 23 年度老人保健健康増進等事業 在宅看取りの推進をめざした訪問看護・訪問介護・介護支援専門員間の協働のありかたに関する調査研究事業報告書 (財)日本訪問看護振興財団

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 二宮彩子、早尾弘子、館野和子
2. 発表標題 全国訪問看護師及びヘルパーの在宅看取りケアに対する自信に影響を与える要因
3. 学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 館野和子、早尾弘子、二宮彩子
2. 発表標題 介護職の在宅看取りに対する自信と経験の実態及びその関連
3. 学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山本 則子  (Yamamoto Noriko)  (90280924)	東京大学・大学院医学系研究科(医学部)・教授   (12601)	
研究分担者	早尾 弘子  (Hayao Hiroko)  (30739595)	公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団・ダイヤ高齢社会研究財団(研究部)・客員研究員   (82679)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	野口 麻衣子  (Noguchi Maiko)  (60734530)	東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・准教授    (12602)	
研究分担者	石橋 智昭  (Ishibashi Tomoaki)  (10407108)	公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団・ダイヤ高齢社会研究財団（研究部）・主席研究員    (82679)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関